

## 「令和3年度川崎区地域デザイン会議」開催結果概要

### 1 日時

令和4年3月23日（水） 10:00～12:00

### 2 場所

川崎区役所7階会議室

### 3 議題

#### 「食糧支援を通じたつながりづくり」

これまでの食糧支援を通じた子育て支援策について振り返りながら、コロナ禍を踏まえて今後の食糧支援を通じた地域におけるつながりづくりの手法等について検討する。

### 4 出席者

- ・地域で実践する区民・事業者等 5団体10名  
中央第2地区社会福祉協議会福祉部、大師第1地区社会福祉協議会青少年福祉部、大家族ふるさと食堂、合同会社ゆいまーる・いきがい工房さらら、社会福祉法人青丘社
- ・団体等支援機関 1名  
川崎区社会福祉協議会地域課
- ・こども未来局職員 2名
- ・区役所職員（事務局含む） 12名

### 5 内容

- (1) 区長挨拶（開会）
- (2) 出席者自己紹介
- (3) 川崎区地域デザイン会議の概要及び今回のテーマについて説明（事務局）
- (4) 活動内容等の説明

○中央第2地区社会福祉協議会福祉部

- ・令和元年に子ども食堂「わいわいキッチン」を開始（会場、地域交流センター、昭和幼稚園）。
- ・目的は食育、孤食をなくすこと。子どもたちにも手伝ってもらい、空き時間はゲームなどを行い楽しむ会にしている。
- ・ボランティア、市立川崎高校福祉課の生徒、川崎区子ども会育成連合会のジュニアリーダーに手伝ってもらっている。

- ・毎月第3金曜日。参加費は100円。
- ・子ども食堂を始めるにあたり課題が2つあった。1つは無償で使用できる会場を見つけること。地域交流センターは共催とすることで無償となった。昭和幼稚園は園長が理解のある方で無償となった。2つ目は募集方法。川崎小学校の寺子屋を運営していたため、その募集と同様に学校に協力してもらって、川崎小学校の児童全員にチラシを配布。20名程度の応募があった。
- ・コロナ禍で子ども食堂ができなくなった時に、福祉部内で食糧支援の可能性を検討。神奈川フードバンクに子ども食堂ではなく、食糧支援でも食糧の提供は可能か確認し、了解を得ることができたため、食糧支援を実施することとなった。
- ・川崎小学校児童を対象にした食糧支援は、令和2年7月から。毎月第4金曜日の16時から18時。初めは寺子屋教室の駐車場で配布。その後、地域交流センターで配布を行っている。コロナ禍で調理ができないので、お米は炊かずに配布。
- ・京町小学校児童を対象にした食糧支援は、令和3年5月から。毎月第2金曜日の16時から18時。初めはなかなか話が進まなかったが、区役所の協力もあり、学校長会で説明させてもらい、実施できることとなった。
- ・京町小学校は放課後に国道15号を越えて遊びに行ってはいけないというルールがあったため、子ども食堂には参加できなかった。食糧配布では京町小学校の近くで行うこととし、京町町内会館で実施。
- ・当初は申込用紙による応募としていたが、令和3年10月からチラシにQRコードを記載し、メールでの募集に変更。申込状況の把握が容易になった。
- ・地域の人たちのために何かできるのかを考えて、とりあえずやってみようという思いが、活動の原動力になっている。
- ・長く地域の活動をしていると、繋がりが広がり、相談できる相手も増えていく。
- ・活動を通じて信頼関係を築き、地域で子どもたちを見守る大人を増やしていくことで、つながりづくりをしていきたい。
- ・今後どうやって仲間・人材を増やしていくかが課題。

#### ○大師第1地区社会福祉協議会青少年福祉部

- ・平成27年に大師地区で悲しい事件が起こったことをきっかけに、子どもの居場所づくり、子どもと地域の人たちとの交流が必要だと考えた、
- ・ひとり親家庭や両親がいても孤食の子どもが増えていることを学校から聞いており、行政からも親子食堂の勧めがあったので、親子食堂を行うこととなった。
- ・給食のない夏休みと冬休みの年に2回実施することとした。
- ・対象となる2つの小学校の全児童にチラシを配り、定員は20名としたところ、好評で少しオーバーした。料理教室という形でカレーライスを作った。

- ・中学生を対象に開催しようと考え、募集したが、開催日を試験の前の土曜日に設定してしまったため。応募がなかった。
- ・次の年はこども文化センターと協力し、流しそうめんを行い、とても好評だった。その年の暮れには鏡餅づくりを行った。
- ・生活が大変な家庭への支援というより、子どもたちの居場所づくり、つながりをつくることを目的にやっていたが、見守り対象となっている家庭の子どもが来てくれ、とても喜んでもらったこと、活動を続けていけば少しずつそういう家庭ともつながっていけると実感した。
- ・中学生の募集に参加者が集まらなかった時に、大師中学校の校長先生から、「中学生になってから急に募集してもダメ。小さい時から地域に馴染むようにした方が良い。」という言葉があったため、親子カフェを行うことにした。
- ・5つの町内会があるので、各町内会で1回ずつ回って実施したいと考えたが、コロナ禍だったため、2町会でのみ実施。
- ・コロナ禍になり子ども食堂の代わりに配食をしようとなった。生活の大変な家庭に配慮を考え、大師支所の保健師に相談したところ、直接持っていくと、なぜ家庭の事情を知っているのか不信感を抱かせてしまうため、保健師を通じて、届けてもらえることになった。
- ・保健師からは、持っていった家庭には喜んでもらえて、これまでは訪問した時に玄関にも入れてもらえなかった家庭でも、気軽に話をしてもらえるようになった、と聞いた。
- ・昨年末に地域の企業からお米をもらったが、保健師に配ってもらうのは大変なので、取りに来てもらうように案内をして、お米と合わせて、お弁当を配った。保健師に配ってもらっていた家庭のうち、3分の2くらいの家庭から申し込みがあった。
- ・配る時にはレシピなどのチラシをつけている。
- ・今まで接点のなかったおばあちゃんから声をかけてもらえるようになった。
- ・今はメンバーが4人になった。さらにボランティアも募って回数を増やして行きたい。

#### ○合同会社ゆいまーる・いきがい工房さらら

- ・ゆいまーるという名前は、沖縄の言葉で「みんなで助け合って生きていこう」という意味。助けあて生きていくには食べ物が必要だよ、ということでおむすびカフェを始めた。
- ・カフェの中にはレンタルボックスがあり、地域のママたちがいろいろな小物を作って、販売している。そこからママたちとのつながりができた。
- ・地域には元気な高齢者がたくさんいることに気づいた。その人たちから暇を持て余しているという声を聞いたので、暇なら子どもの見守りをしないかと声をかけたのが、いきがい工房さららの始まり。

- ・おむすびカフェの営業時間外に場所を借りて、朝の子どもの見守りと、学校が終わる3時くらいからの子どもの居場所として解放、また、夜は週に1回程度、高校教師を退職した方に協力してもらい勉強場所として解放するという事も始めた。
- ・朝の見守りをやりたいという思いが初めからあった。保育園は朝7時から空いているのに、小学校になると8時から。この1時間がママたちにとっては不安な時間。この不安をなくしてあげたいという思いから。希望があれば朝食も配っている。
- ・3時からの居場所として使っていた場所は途中から保育所ができたので入れなくなった。それまで毎日のように来ていた子どもたちは来なくなるかと思ったが、それからも来てくれて、おしゃべりをしていく。
- ・2年ほど前からは月に1回、子ども食堂を始めた。地域の高齢者も毎月10人くらい手伝いに来てくれる。こども食堂を目的として地域の元気な高齢者が集まり、高齢者の居場所にもなっている。また、レンタルボックスを使っているママたちも手伝いに来てくれて、毎回100食ほど提供している。
- ・もともと小さなお店なので、中で食べることは考えておらず、初めからお弁当を配る形にしている。
- ・子どもだけでなく、一人暮らしの高齢者も対象にして、配達もしている。
- ・ひとり親家庭や生活が大変な家庭に届いているのか不安があったので、今年の夏に、ひとり親家庭支援として、毎週土曜日にカレーライスを無料で提供するという事を始めた。実際にひとり親家庭の方が来てくれるようになり、銘を打ってやることも大事だと感じた。
- ・カフェもやっているのですが、地域活動とカフェの線引きが難しく、地域への宣伝がなかなかできなかったが、地域活動の部分だけのチラシを作ったところ、町内会の回覧板で回してくれることになり、地域の人たちとのつながりも作り出せるようになった。

## ○大家族ふるさと食堂

- ・2017年から、経営する幸区のベトナム料理のお店の定休日を利用して始めた。
- ・ダンススクールをやっているが、お腹が空いていないからといって弁当を持ってこない子や偏食の子も多い。お昼ご飯がグミだけ、3食インスタントラーメン。掘り起こしてみると親が共働きで、お母さんが忙しくて弁当を用意できないということがわかった。色々な事情がある。
- ・これはまずいのではないかと考えて、月1回、顔の見える関係を作ろうと思い、子ども食堂を始めた。ベトナムの人たちが集う店だったので、地域の人たちにベトナムを知ってもらうため、地域との接点を持ちたいとの思いもあった。
- ・月1回コミュニティーサロンのようなイメージでやっていた。
- ・コロナで学校が休校になり、子どもたちの行き場がなくなったので、学童型として、ご飯も提供する学童を始めた。

- ・緊急事態宣言が出てからは、お弁当の配布にした。毎日、大人は500円、子どもは無料で配布するようになった。
- ・食材は地域の人たちや商店街の人たちが持ってきてくれた。
- ・コロナ前は2、30人入るお店にたくさんの人たちが来ていた。外国の人たちも。最初はビュッフェスタイルだったが、その後、大皿を囲む大家族スタイルでやるようになった。子どもたちの居場所。ママ同士のつながりの場となった。
- ・お弁当と食堂の違いは、作り始める時間が早くなり、ボランティアに来てくれる人も変わった。若い学生はこれなくなり、60歳以上の人たちが多くなった。
- ・コロナの影響で、2020年12月に幸区のベトナム料理店を閉めることになり、店舗の規模を縮小し、川崎区宮本町に移転。
- ・宮本町に移ってからも幸区時代に食材を提供してくれた人が、協力してくれている。
- ・支援者・協力者と地域の人々をつなぐ。その中で見守りが自然と生まれる、という気持ちでやっている。ボランティア団体や地域企業や商店との連携も取れてきている。
- ・少し慣れてきて余裕ができたので、目でも楽しんでもらえるようなお弁当を作るようになった。お米やお菓子などのお土産もつけている。
- ・弁当配布は、注文食数1回約100食。子どもと大人の比率は2：1。月2回。
- ・宮本町で作ったお弁当を、1回は幸区のメロディココで配付している、殿町・浅田の支援者（こ文関係）を通じて必要などところに届けている。申し込みはLINEで1週間前から。
- ・また、自分がやっている学童型のスクールで、月1、2回カレーの日をやっている。食べる姿を見ていると各家庭の状況がわかってくる。
- ・子どもやお母さん支援だけでなく、お父さん支援も含まれている。また、一人暮らしのお年寄りにもお弁当を届けて、様子を見たりしている。

#### ○社会福祉法人青丘社

- ・青丘社ではもともと、困難な状況にある子どもや外国につながる子どもの居場所づくりに取り組んでいたが、全国的にも子ども食堂が注目されるようになり、桜本地区でも子ども食堂をやりたいという声が出るようになり、2016年8月に子ども食堂を始めた。
- ・コロナ禍でみんなで食べることができなくなったが、会食形式からお弁当形式に変えて取り組みを続けている。
- ・会食形式では子どもたちが集まり、楽しみながら食事ができていたが、お弁当形式でも、お母さんたちの夕食を作る負担の軽減や家族みんなでお弁当を食べられるということで、喜ばれるようになった。
- ・子どもの居場所から子育て支援にシフトした。
- ・食糧が集まるのか心配だが、想像以上に集まっている。

- ・コロナ禍だと食料を持って家庭訪問をするというのは嫌がられるかと思ったが、意外にも話を聞いてほしいという家庭が多かった。
- ・一斉休校下で2020年7月に急遽始めたのが、桜本フードパントリー。
- ・70世帯、200人くらいが集まる。8割が外国籍で、そのほとんどがフィリピン人。その他、ペルーやベトナム、中国など。日本人は声かけをしてもなかなか来なかったが、少しずつ増えている。
- ・子どもたちも進んで手伝ってくれる。
- ・食糧支援の役割は大きく分けて2つあると思う。1つは専門職の支援付き食糧支援、もう1つは地域の人たちの支え合い・見守りベースの支援であるフードパントリーやこども食堂。
- ・支援付きの食料支援はさらに2つに分けられる。積極的な援助・支援が必要な困難ケースの食糧支援と、心配だが見守りを継続していけばなんとかなると思われる家庭への専門職によるみまもりベースの食糧支援。
- ・積極的な支援が必要な困難ケースでは、その家庭のニーズに合った食糧の提供が必要。
- ・専門職による見守りベースの支援では、食糧支援により、生活のすべてを支えるほどの量の食糧を提供することはできないにしろ、食糧が支援のツールになる。
- ・地域住民による、みまもり・支えあいベースの食糧支援では、色々な人たちが来るので各家庭の細かいことはわからないが、取り組みの中で出会った人たち同士のつながりができ、顔の見える関係づくりという点では良いと思う。
- ・食糧支援をツールとしながら、誰も取り残さない地域づくりにむけてのセーフティネットの整備が進んでいって欲しい。
- ・子どもは遠くまではいけないので、こども食堂、フードパントリーが小学校区にひとつずつぐらいできていくと良いと思う。

##### (5) 意見交換

- ・中学生がなかなか来れないというのはわかる。小さいころから受け入れて、見守っていくことが大切だと思う。ふれあい館には中学生は多く来るのか。(大家族ふるさと食堂)
- ⇒中学生はなかなか来ない。小学校時代から来ている子は友達を連れてきてくれる。かかわりの継続と子どもたちのつながりにどうやって入っていくか。
- 地区ごとにこども文化センターなどの子どもとつながっている施設があるので、そこつながって一緒にやっているとやりやすくなると思う。(社会福祉法人青丘社)
- ・他の団体が財政的にどうしているのか興味がある。また、始めたいと思った時に悩んだという話があったが、市役所に正式な窓口がないので、作って欲しい。横浜市の

こども青少年局では「横浜で子ども食堂・地域食堂を作ろう」というパンフレットを作っている。

小学校区に1つくらい子ども食堂などの拠点がないと地域で子どもと顔が見える関係は作れない。自分のところは広い範囲から子どもたちが来ているので、日常的に顔の見える関係ではない。

弁当にしたことで、来やすくなった家庭もある。以前はママの居場所という感じだったが、お弁当にしたことで、食に困っている子どもたちが来られるようになったと感じている。

区や市はどれだけ子ども食堂があるのか掴めていないと思う。1, 2年前に「かわさき子ども食堂ネットワーク」ができた。市内で60くらいは登録している。今日参加している団体は地域と結びつきを持っていると思うが、他の食堂ではなかなか地域との結びつきが持てず、模索をしているところも多くあると思う。行政には橋渡しをしてもらいたい。

地域の子ども食堂だけでは困っている人たちを全てカバーできない。コロナで一斉休校になった時、就学支援を受けていたり、ひとり親の家庭など、給食がなくなって困っている家庭に食糧を配布したらどうか、という提案を市長への手紙でしたことがあるが、実施はされていない。(大家族ふるさと食堂)

## (6) 活動内容等の説明 (団体等支援機関・市役所)

### ○川崎区社会福祉協議会地域課

・小学校の一斉休校の際に、学校給食をあてにしていたネグレクト世帯などが、食糧に困っているという相談を区役所の社会福祉士から受けた。また、多くの子ども食堂が止まってしまっている状況となっていたため、市社協と連携し、社会福祉法人の施設や企業などの協力を得ながら、期間限定で食糧支援をすることとなった。休校期間中の予定だったが、現在も継続している。

・もともとの対象は要対協支援対象のネグレクト世帯の子どもたちだったが、現在は、困窮世帯や生保世帯、児相の把握しているケースにも支援を拡大している。

・食事を満足にとれていない、とれていないかが不安で支援が必要と思われる世帯に、区内の施設や企業等から協力してもらい食糧品等を提供している。

・配布方法は大きく分けて2つ。施設・企業等に食糧品の提供を依頼し、区内拠点施設に集約して、必要な家庭に取りに来てもらう、または届ける。もう一つは、今はやっていないが、緊急一時的に協力してくれた施設からの直接的な支援として、障害者施設で作ったパンを無償で提供してもらい、配布。

・関係機関の役割分担としては、区社協では、企業や施設、区民の人たちに食糧の提供の呼びかけをおこない、食糧保管拠点（南部身体障害者福祉会館、たじま家庭支援センター）に集約をしている。南部身体障害者福祉会館は別の支援の拠点となったため、現在は田島のみ。

・区福祉事務所や青丘社などの支援機関、地区社協の人たちは、保管拠点から必要な食料を配布してもらいながら、見守りを行ってもらっている。

・食糧支援の成果として、家庭へ訪問する際に、食糧があることで受け入れてもらうことができたという話や、虐待リスクのある家庭の状況を把握する機会を得ることができ、生活困窮の実態が明らかとなって、関係機関につなぐことができた、という話を関係機関から聞いている。

・食糧支援は関係機関同士の連携や住民同士の支え合いを強めるツールにもなっている。地域の方からの情報で、今まで把握していなかった困窮世帯を見つけることができた。

・課題として、栄養バランスの取れた配布ができなかったり、配布に多くの労力が必要なこと、また、食べられないことが常態化してしまっている子どもと支援者側の感覚のズレが大きかった。

・始めた当初は緊急的な支援としての食糧提供だったが、少しずつ地域の人たちの理解が得られるようになり、食糧の供給量が増えたことや、関係機関の工夫により、ニーズをキャッチする機会が増えた。

・子どもたちの様子だけでなく、家庭の様子も見えてくるようになった。休校などで親子の接する時間が増え、摩擦が生じていたり、支援を要する家庭にあっても援助希求が低く、なかなか支援を受け取ってもらえない場合もある。

・今後の区社協の役割として、ニーズをキャッチするための網目を重層化し、支援の必要な家庭を取りこぼさない支援展開を考えていくこと。

・適切な情報発信による支援対象者への正しい理解に基づいた適度な関わり、ゆるやかな見守りの目を増やしていくこと。

・子どもたちの希望や課題、多様な生き方を受け止める地域の土壌作り。

・支援をしてよかった、支援を受けてよかったと双方が思えるような企画・展開を増やしていくことを目指す。

・今後の展開としては、食糧支援を続けていくうえで一番大切なこととして、これまで以上に食糧の安定的な確保や食糧の供給量と在庫状況の把握が必要。

・取組の周知や啓発にも力を入れていきたい。取り組みを知ってもらって協力者を増やすとともに、地域の人たちに現状を知ってもらい、何かできることがあると気づいてもら得るような投げかけをしていきたい。

- ・今は行政などの関係機関だけでやっているが、今後は、区社協の持っているつながりを活かして、民生委員児童協議会や地区社協、町会に対してもアプローチを行っていききたい。
- ・中学校単位での食糧支援の促進や、ラジオ体操の場で食糧を配布するなど、既存の取り組みとの連携を図っていききたいと考えている。
- ・支援協力者・団体へフィードバックをして、更なる協力を得られるようにしていきたい。
- ・区社協で元々実施している福祉教育などの事業の中で、子どもたち自身が SOS を出しやすい雰囲気づくりも考えていきたい。

#### ○こども未来局企画課（「子ども・若者調査結果分析」について）

- ・「川崎市子ども・若者の未来応援プラン」が令和4年度から始まる。その資料とするため令和2年度に大規模な調査を行った。
- ・対象は未就学児の親、小学校2年生の親、小学校5年生の本人と親、中学校2年生の本人と親、16～30歳の若者。
- ・ひとり親世帯が困窮している状況。川崎区・幸区が貧困世帯が多い。
- ・今回の調査で最も顕著な特徴が出たのが所得による学力格差。貧困層ほど「成績が低い」と回答している。川崎区は「成績が低い」と回答している割合が高い。
- ・勉強時間についても、川崎区では全くしない～30分以下という回答が多かった。塾に行っている子や親に教えてもらっている子も少ない。
- ・朝ごはんを食べる頻度は全体的には8割くらいあるが、川崎区は毎日食べているという回答の割合が低く、週に1、2日は食べないという割合が高かった。
- ・放課後から夜の時間帯に過ごす場所として、自分の家という回答が少なく、友達の家、公園。ショッピングモールという回答が多い。
- ・悩み事を相談する相手として、親と回答する割合が低く、オンラインゲームやSNSで知り合った人と回答した割合が高かった
- ・親の考えに子どもがどれだけ影響を受けているかを分析したデータとして、保護者が進学は高校までで良いと考えていると、子どもも同じ考えになるという結果が出ている。所得による影響はない。川崎区では高校までで良いという割合が高い。
- ・自分は高校までで良いと回答した子どもは、自分のことが好きではないと回答する割合が高い。
- ・全体の傾向として、相談する人が少ないほど、自分の将来が楽しみ、自分のことが好き、家族に大事にされていると感じている割合が低い。

- ・親の考え方によって子どもの将来展望が制限されないようにするためにも、色々な人との関わりの中で、子どもの将来展望を広げる取り組みが必要。
- ・所得に関わらず、学ぶ機会（勉強に限らず）の創出も必要。

○こども未来局児童家庭支援・虐待対策室（「食糧支援等を通じた支援が届きにくい子どもや家庭を適切な支援につなぐしくみづくり」について）

- ・「食糧支援等を通じた支援が届きにくい子どもや家庭を適切な支援につなぐしくみづくり」の事業は、先ほど説明した調査を踏まえて、モデル的に行っていく事業。
- ・親の生活状況や考え方による、子どもの将来展望、自己肯定感の格差が調査の中で出てきているし、児童虐待の報告の件数も全国的に右肩上がり、川崎市でも急激に上がってきている状況。
- ・これまでは既に起こっている虐待に対する支援がメインだったが、これからは予防に向けた取り組みにも力を入れていくこととしている。
- ・事業の内容は簡単に言うと、支援が必要な家庭を把握して、支援する。
- ・青丘社や区社協からも話があったが、複数の層の支援がある。行政の専門職においても、在宅でケース支援していく中で、生活を見守り、生活改善を行うまでの、一定の関わりが必要だと考えている。
- ・行政が関わっていく中で、地域の人たちの主体的な活動を、行政の個別支援にどのようなつないでいくか、と言う取り組みになっている。
- ・行政としても、食糧をツールとした支援は家庭に入りやすい。また、生活状況の確認もしやすい。
- ・仕組みを作るには課題も多く、地域の主体的な活動と行政の個別支援を連携させていく重要な取り組みなので、皆さんからの意見を伺いながら、中・長期的なスパンで取り組んでいく予定。
- ・この事業は地域のネットワークを広く持っている団体に委託をし、連携して行っていく。

## (7) 意見交換

- ・一見お金があるように見える家庭でも、家のローンや子どもの塾の費用で家計がひっ迫して母親のストレスがたまり、子どもに対する暴力・暴言や夫婦の関係が悪化しているような家庭が増えているように感じる。このような見えない貧困に対して民間団体が力になれると思うがどのように考えているか。（大家族ふるさと食堂）
- ・経済的な余裕はあるが、親のメンタルや学習面での過干渉で子どもがストレスを感じるなど、日常では目につかない家庭内の問題が市内全域で増えてきていると感じている。そ

の問題には児童相談所が主に関わっているが、支援が必要なことを親にどうやって理解してもらおうかという課題がある。また、親自身もプレッシャーの中で息が抜けない状況にあるので、親だけでなく複数の目が子どもを見守っている状況が必要だと感じている。((こ)児童家庭支援・虐待対策室)

・今日は団体等からの話やこども未来局から調査結果の説明があったが、このまま会議が終わってしまっは、区がどうしていこうと考えているのか、自分たちの取り組みがどう力になれるのか、どのような支援をしてもらえるのか、区と自分たちが一緒に何を目指すのかが見えない。(いきがい工房さらら)

・民生委員や保健師にもヒアリングが必要だと思う。また、こども未来局の話の中で、取りこぼさないという話があったが、我々には取りこぼさないという取り組みは出来ない。行政にはピンポイントでの支援ではなく広く網を張って(対象を広げて)支援して欲しい。(大家族ふるさと食堂)

・取りこぼさないためには、社会的なシステムとして、困っている人たちに出会うための仕組みづくり、支えるためのチーム作りが必要だと思う。行政による専門的な支援と地域の中での子どもの付き合いが両輪となって地域づくりをしていけたらと考えている。(社会福祉法人青丘社)

・子ども食堂で無料でお弁当を配っていると、隣の飲食店から苦情が来る、という話を聞いたことがある。子ども食堂の発展にはマインドチェンジが必要だと思う。(大家族ふるさと食堂)

・当然、今回1回だけで解決できるとは考えていない。継続的に協議をしながら、地域の課題解決に資するような方向性を示していけたらと考えている。(事務局)

#### (8) 総括 (副区長)

- ・各団体のいろいろな活動をこの場で共有できたことは区としても大きな財産になった。
- ・区社会福祉協議会からプラットフォーム作りの提案があったが、子どもは親や学校の先生以外の大人とも関わることを求めていると思う。そういった地域の見守る目が必要。
- ・専門的支援を行う行政につなげる流れ、仕組み作りが重要なポイントだと感じた。